

【特集論文】

『市大社会学』に寄せて

——研究者生活を振り返る——

進藤雄三

この3月で研究生生活を終える。このタイミングで『市大社会学』編集委員会から、自由投稿の依頼を受けた。依頼を受けて思っていたのが、『市大社会学』にこと寄せて、19年間の在籍となった大阪市立大学の社会学教室の教員、院生の姿を振り返り、同時に30年あまりに及ぶ社会学研究者としての自分を顧みる文章を綴る、というものだった。

1 大阪市立大学社会学教室へ

大阪市立大学に着任したのは、2001年4月1日。母校の京都大学の後期博士課程を中途退学して助手を2年間務めた後、前任校の奈良女子大学に赴任し、家政学部（後に生活環境学部へ改組）の生活経営学科・家族関係学講座に12年間所属した。家族関係学講座に所属していたことから、担当科目は講義科目としては社会調査法と家族関係学関連の科目（家族・社会システム論）などであった。大阪市立大学では理論社会学分野担当ということで、社会学史・社会学概論が主たる担当科目となった。この二つの科目のために一からのノートづくりをしている折に、「社会学」を真正面から講述すること自体に、「家政学」から「社会学」への里帰り、という感懐を抱いたことをよく覚えている。

赴任当時の社会学教室には、いじめ・不登校研究の森田洋司先生、野宿者研究の島和博先生、沖縄・エスニシティ研究の谷富夫先生、アメリカの対日プロパガンダ研究・メディアの歴史社会学的研究の土屋礼子先生、メディア研究・メディア文化研究の石田先生と、錚々たる5名の先生が在籍されていた。個人的に直接面識のある先生は一人もいなかったが、大阪市立大学の社会学が「日本のシカゴ学派」ともいえるべき伝統を持ち、大阪という都市をフィールドとした都市問題あるいは社会病理・社会問題研究のメッカであるという印象を抱いていた。折しも、2001年には『野宿生活者（ホームレス）に関する総合的調査研究報告書』（大阪市立大学都市問題研究会 [研究代表者：森田洋司]）が刊行され、1996年の調査実習報告書（『大阪市における野宿生活者問題に関する研究』（大阪市立大学文学部社会学研究室刊 [研究代表者：森田洋司]）以来のホームレス調査が進行していて、資料室にはその資料とその研究に従事していた院生（大倉裕二・堤圭史朗・妻木進吾氏等）な

表 1 『市大社会学』の創刊号

〈論文〉	
近藤泰裕	役割行動と社会的自己—E. ゴフマンの「役割距離」再考
松永寛明	刑罰観衆の二形態
高畑幸	バイカルチュラル・アイデンティティの構築に向けて —日比家族の第二世代の事例から
二階堂祐子	在日韓国人の適応過程—ある一家のライフ・ヒストリーから
趙美景	二重構造のはざま—韓国名家で生きた 1 人の継母の生活史
〈研究ノート〉	
岸政彦	ラポールと語りの政治

どが出入りしていた。その年の修論審査で、妻木氏の論文を読む機会があり、厚い記述と実証に裏付けられた鋭い指摘に感心するとともに、市大社会学の背骨を感知させられたことをよく覚えている。

その後の社会学教室の構成員の変遷を概観しておく、着任後 2 年目にまず島先生が経済研究科に移り、その後任として 2003 年に計量系調査科目担当として木村好美先生が着任。翌 2004 年には、森田先生が大阪樟蔭女子大学の学長に転任されたが、後任人事が凍結となり、以後社会学教室は 6 名体制から 5 名体制で運行されることになる。その後 2008 年には土屋先生が早稲田大学に、2009 年には木村先生が同じく早稲田大学に転出し、その後任として朝鮮研究・社会人類学研究の伊地知紀子先生、フランス社会研究・比較社会研究の川野英二先生がそれぞれ赴任され、現在にいたっている。また 2012 年には谷先生が甲南大学へ転出され、その後任としてニューヨーク・横浜をフィールドとする都市社会学研究の笹島秀晃先生が着任し、現在にいたっている。

2 『市大社会学』の変遷：数量の推移と投稿者の推移

『市大社会学』は市大への着任の 1 年前の 2000 年の 3 月に、社会学研究室編集・発行元となり、谷先生を代表として第 1 号が刊行されている。その構成は表 1 のようになっている。

大学院生に発表の場を与えるということが発刊の目的であったことを反映して、理論系論稿が 1 篇、逸脱系論稿が 1 篇、エスニシティ、在日および韓国人研究が 3 篇という配置になっている。

次に、現在にいたる全体の俯瞰としてジャンルごとの本数を見ておくと表 2 のような

市大社会学 第 17 号 (2021)

表 2 投稿ジャンル掲載本数の推移 (2000-2019 年)

号数	年度	論文	研究ノート	書評	備考
第 1 号	2000	5	1		
第 2 号	2001	4		2	
第 3 号	2002	6	2	2	
第 4 号	2003	5			
第 5 号	2004	4			特集 (英語 5 篇)
第 6 号	2005	4	1	2	
第 7 号	2006	4			
第 8 号	2007	4		2	
第 9 号	2008	4		2	
第 10 号	2009	2	1	4	
第 11 号	2010	4		3	
第 12 号	2011	5	2		
第 13 号	2012	3		3	
(2013 年から 16 年まで 4 年間休刊、第 14 号からオンライン版に移行)					
第 14 号	2017	4		2	(資料 2 篇)
第 15 号	2018	2	2	5	
第 16 号	2019	1		3	

推移となっている。号数によって増減はあるものの、平均して論文は 1 篇、研究ノートは 1-2 篇、書評が 2 本、という分量であることが読み取れる。

この投稿数の推移を踏まえて、特に『市大社会学』投稿院生に着目してみると、大別して二つの時期にわけることができるように思われる。およそ 2006~2007 年までが前期で、書評を含めて 2 回以上の投稿者は、近藤泰裕 (論文 4 篇)、松永寛明 (論文 4 篇)、大倉佑二 (論文 4 篇)、松本訓枝 (論文 3 篇)、堤圭史郎 (論文 3 篇)、二階堂裕子 (論文 2 篇)、高智富美 (論文 2 篇)、高畑幸 (論文 1 篇・ノート 1 篇)、小村富美子 (論文 1 篇・書評 1 件)、大橋庸子 (論文 1 篇・書評 1 件) の 10 名である。時期的には 2006 年~2007 年と重複する部分があるが、それ以降の時期 (オンライン版を含む) での複数投稿者は、佐々木洋子 (論文 2 篇・資料 1 篇)、渡辺拓也 (論文 2 篇・書評リプライ 1 件)、永山博美 (論文 2 篇・書評 1 件)、八木寛之 (論文 2 篇)、祝方悦 (論文 2 篇)、ケイン樹里安 (論文 2 篇)、上原健太郎 (論文 1 篇・ノート 1 篇・書評 1 件・資料 1 篇)、松井広志 (論文 1 篇・

ノート1篇・書評1件・書評リプライ1件)、傅琳淋(論文1篇・書評1件)、植田千晶(論文1篇・書評1件)の10名である。

上記の20名に単独論文投稿者を加えた30名強のうち、この20年間のうちに20名以上の博士論文提出者があったと記憶する。また、その提出者のかなりの院生が研究者として就職していったことを踏まえると、『市大社会学』が院生の発表の場として重要な役割を担ってきたことが十分にうかがえる。

3 研究者生活を振り返って

1) 京都大学時代

京都大学に助手として採用されて以来の34年間の研究者生活を振り返ってみると、やはり学部・大学院時代の恩師の顔がまず思い浮かんでくる。教養部時代の作田啓一先生、高橋三郎先生、高橋由典先生、学部時代の池田義祐先生、学部から大学院時代の中久郎先生、宝月誠先生。入学時の作田先生のゼミはマートンの『社会理論と機能分析』(青木書店)であった。学部時代では、中先生の社会学概論の講義後、コントの「三段階の法則」について質問した折に「コント、面白いですか」とおっしゃられていたのがなぜか印象に残っている。学部3回生から、パーソンズ研究を進めておられた助手の溝部明男先生のもとで、私的な読書会が始まり、パーソンズの初期論文集を読み進めるなかで、当時一般的と思われていた機能主義者・AGIL図式の提唱者パーソンズとはおよそ異なった印象を抱くにいった。学部4回生の折に、当時関西学院大学に客員教授として来日していたパーソンズの講演を直接聴いたことも思い起こされる。

中先生は主著の一つ『デュルケームの社会理論』(創文社)を1979年に上梓され、コミュニティ・共同体論の理論的・経験的研究、さらには国会議員を対象とした政治社会学的研究を進めておられ、大学院進学時には社会学の理論的統合を視野にパーソンズ研究に力を入れておられた。その縁で、助手時代に世界思想社から刊行された『機能主義の社会理論』(1986)、『現代社会学の諸理論』(1990)にパーソンズ、ウェーバーに関する論稿をそれぞれ掲載させていただき、1995年にはロバートソン・ターナー編のパーソンズに関する論集『近代性の理論』(恒星社厚生閣)を共訳者として参加させていただいた。また、1999年には中先生編著の『持続と変容』(ナカニシヤ出版には、「ポストモダン論の解説」)を寄稿させていただいた。

また、宝月先生はベッカーのラベリング理論を日本に初めて体系的に導入した大村英昭先生との共著『逸脱の社会学』(新曜社)を1979年に上梓され、その後、単著として『暴力の社会学』(世界思想社:1980)、編著として『薬害の社会学』(世界思想社:1986)を刊

行されるとともに、多様な社会問題に関する研究会を主催されていた。助手時代に、ちょうど大阪大学医学部の集中治療室から共同調査の申し出があり、それを契機に「医療社会学」研究が始まった。文献を検索してみると、この分野は日本でも手薄であり、特に「社会学」者によるものはきわめて希薄であることが判明し、文献の包括的整理自体が十分な意義を持つことが理解されるなかで、宝月先生からはそれを書籍としてまとめること、さらに代表的な文献の翻訳を上梓することの2点を提案いただいた。それは1990年の『医療の社会学』（世界思想社）、そして1992年の訳書フリードソン『医療と専門家支配』（恒星社厚生閣）として刊行された。以来、宝月先生とは社会調査のテキスト『社会状況の分析』（恒星社厚生閣：1997）、ベッカーの社会学方法論『社会学の技法』（恒星社厚生閣：2012）の3冊の訳書に参加させていただいた。また、宝月先生の退官される2004年度には漸くにして博士論文を提出しえて学位を取得し、また退官に際しては『社会的コントロールの現在』（世界思想社：2005）を共編著として上梓させていただいた。

2) 奈良女子大学時代

書籍の上梓という観点からいえば、すでに言及した単著の『医療の社会学』（1990）および訳書の『医療と専門家支配』（1992）、『近代性の理論』（1995）、『社会状況の分析』（1997）、さらに黒田氏との共編著『医療社会学を学ぶ人のために』（世界思想社：1999）はすべて奈良女子大学在籍時になされている。奈良女子大学の所属は家政学部・生活経営学科・家族関係学講座ということもあり、講義・演習を含めて家族に関する研究が中心とならざるをえなかったが、書籍上の研究内容は助手時代の延長線上にあった。

奈良女子大学在籍時に、特に印象深かったのは直接の上司であった石川實先生、そして1994年から1995年にかけての在外研究であった。石川先生は、マートニアンと言っている天才肌の先生だった。いかなるテーマ、対象にも一家言を持ち、的確にして深い洞察力を示され、研究上のみならず、私的にも大変お世話になった。特によく覚えているのは、先生が学部長時代に改組がらみで文部省との折衝にあたっていた折のやりとりで、その鮮やかな即興の切り返しには言葉を失うほどであった。先生との研究上での繋がりに関しては、塩原先生・大村先生との共編著『ターミナル家族』（NTT出版：1993）への「医療化社会と家族」の寄稿、また1995年の『家族研究論叢』の創刊、翌年の同誌への「日本型『近代家族』再考」の寄稿、1997年の編著『現代家族の社会学』（有斐閣）への「家族の概念と定義」「家族と医療」の寄稿、1998年の編著『生活文化を学ぶ人のために』（世界思想社）への「生と死をめぐる環境」の寄稿と、多岐にわたる。「医療」研究と「家族」研究の接点を求めることが、この時期の関心の焦点であった。

1994年の夏期から1年間に及んだ文部省の在外研究は、質的に研究上の転換点を与え

てくれたと思う。受け入れ研究先に選んだのは、理論社会学と医療社会学の双方の分野において英語文化圏でプレゼンスを高めていたブライアン・ターナーが在籍するオーストラリアのディーキン大学と、医療社会学の世界的ベストセラー・テキスト著者として知られるウィリアム・コッカーハムが在籍するアメリカのアラバマ大学バーミングサム校であった。それぞれの滞在地が、これまでの研究生生活になかった問題意識を与えてくれたのだ。研究上何をしていたかと言えば、ディーキン大学では『近代性の理論』の翻訳、アラバマ大学では『社会状況の分析』の翻訳にかなりの時間を割いていた記憶があるが、環境の与えた影響は大きかった。オーストラリアでは当時開催予定の APEC 参加国の現状が連日新聞報道されていたこともあり、かつて白豪主義をとっていたオーストラリアが「多文化主義」へと舵を切る動向が見て取れたが、そうした言説の背後にある現実——オーストラリアにおけるアジア系留学生の数、エリート層におけるアジア系の飛躍的増大——が同時に圧倒的な印象を与えた。近代において2大陸を摂取したアングロサクソン中心世界の一角で、壮大な地殻変動が起きているのではないか——この感慨が、遅ればせながら「ポストモダン」という言説の存在と深く共鳴することを感知したのだ。もちろん、これにはこの分野でも積極的な活動を展開してきていたターナーの著作、論文を介してという側面もあったとはいえ、「ポストモダン」への関心がわき上がり、その視点は転換した。やや上梓は遅れたが、「ポストモダン論の解説」(1999)はここに淵源している。

アメリカのアラバマ大学では、いくつものカルチャー・ショックを体験した。その最大のもものは、やはり人種問題であったと思う。“deep south”として知られるアラバマ州、バーミングサムの北に位置するアトランタにはマーティン・ルーサー・キングセンターがある。入館時には黒人用と白人用別々のトイレの展示、閑散とした内部では1960年当時の公民権運動の写真と当時の人々の喧噪の音声が流れる。日をおくことなく、ボストンのケネディ・ミュージアムを訪れたこともあって、公民権運動が非常に近いものに思えてきた。1861年から1960年にいたるまで、この100年間は一体何だったのか。ポストモダンへの関心は、奴隷貿易、アフリカの収奪の近代史へと結びつく。恥ずかしながら全米初の黒人大学であることすら知らず、タスキーギ梅毒事件(1932-1972)の現場であるタスキーギ大学を別用で訪れた折の印象も強烈だった。当時の夜、校外の市の広場でコンサートがあり参加した。数千人の参加者のほぼ100%近くの人たちはブラックで、自らの肌の色を初めて強く意識した。もう一つ印象に残っているのは、『近代性の理論』の編者の一人、宗教社会学の理論研究者として知られるロランド・ロバートソンにピッツバーグで面談し(ロバートソンは当時1992年刊行した『グローバリゼーション』(東大出版:1995)の日本語訳が進行中であった)、同時にピッツバーグ郊外を見学したことである。カーネギー要する鉄鋼の街ピッツバーグに往時の面影はなく、「再生」が強調されていた。その郊外

で、宮崎駿の19世紀イギリスの工場街とおぼしき町並みを彷彿とさせる情景をいくつも目にした時に、「ノスタルジア」という言葉がふと腑に落ちたように感じた。アメリカを起点とした20世紀の重厚近代は、確かに終わったのか——ベルリンの壁が落ちた、という出来事以上に、「近代」が終わりを迎えつつあるのか、という感慨であった。

3) 大阪市立大学時代

大阪市立大学在籍時の書籍としては、博士論文を基にした単著『近代性の理論』(世界思想社: 2006)、『社会的コントロールの現在』(世界思想社: 2005)、『医療化のポリティクス』(学文社: 2006)、『新たなる排除にどう立ち向かうか』(学文社: 2009)の3冊の編著、『逸脱と医療化』(ミネルヴァ書房: 2003)、『死の予告』(ミネルヴァ書房: 2006)、『社会学の技法』(恒星社厚生閣: 2012)の3冊の訳書、1冊の共著『系統看護学講座 社会学』(医学書院: 2012)がある。

赴任時以降の研究上の流れとしては、一つには『医療の社会学』の最終章で取り上げていた「医療化」論の古典『逸脱と医療化』の翻訳(2003年)と、その日本への応用版としての編著『医療化のポリティクス』の上梓がある。この流れは、森田先生の存在を抜きにしてありえなかった。というのも、『逸脱の医療化』の翻訳前から日本社会病理学会への入会を進められており、2002年に「医療化」をめぐるシンポジウム構築を依頼されていたからだ。森田先生との共編著『医療化のポリティクス』(2006)はその産物である。また、これ以降森田先生を研究活動委員長とするシンポジウム企画にも参加を続け、『新たなる排除にどう立ち向かうか』(2009)は社会的排除 - 包摂論に関するシンポジウムの展開版であった。

もう一つの流れは、オーストラリア、アメリカでの在外研究時に芽生えた「ポストモダン」言説への関心が、ジクムント・バウマン(1925-2017)の業績への関心へと焦点化されていった点である。折しも、「パーソンズ百周年記念シンポジウム」を企画されていた富永健一郎先生からの誘いを受け、「パーソンズ社会学における『医療』の位置」を『パーソンズ・ルネッサンスへの招待』(勁草書房)(2004)に寄稿し、その延長線上に、「近代性をめぐるパーソンズとバウマン」を『理論社会学の可能性』(新曜社: 2006)に寄稿した。バウマンへの関心は、パーソンズを中心とした『近代性論再考』(2006)の基礎視角にも組み込まれている。その後2007年に「バウマンとパーソンズ——近代性をめぐって——」を『社会学史研究』に寄稿して以降、特にバウマン論として論文化することはなかったが、バウマンの時代認識、社会観察はコンスタントに準拠参照点であり続けた。『社会学評論』の求めに応じて書いた「医療と『個人化』」論稿(2004)は、バウマンの視点に基づいており、個人的に思い入れのある論稿の一つである。

大阪市立大学在籍時に、2 度の在学研究の機会を得た。最初は 2004 年の夏期 2 ヶ月間、「医療化」論の創始者ともいえるべき、アメリカのボストン郊外のブランダイス大学のピーター・コンラッドのもとを尋ねた。実は、この短期の滞在期の目的は、博士論文の作成であった。文献を 5 箱ほど滞在先に送り、8 月中旬のアメリカ社会学会にも参加しながらも、およそ 40 日の間に数百枚の原稿を朝から晩までひたすら書き続けた。滞が残すところ数日のところで脱稿し、帰日前日に、比較的近隣の観光地化しているセーラム村（17 世紀の魔女裁判で全米的に有名。『逸脱と医療化』の冒頭でも言及している）を訪れることができた。またこの滞時に、ハーヴァード大学に留学していた加藤源太さんとの繋がり、医師にして社会学者であるニコラス・クリスタキス教授と面会し、その著書『死の予告』の翻訳をその場で申し出た。

2 度目は 2014 年の年度末の 2 週間ほどで、ハーヴァード大学からイエール大学に移られた先のクリスタキス教授のもとに「死と死別の社会学」の包括的研究の契機を求めてのものであった。「死」というトピックは、敬して遠ざけてきてはいたが、個人的には研究生活開始以前から関心はあった。中先生主催の「戦時下日本の研究会」では、特攻の手記分析を試みて挫折、ICU に関する共同研究でも「高度医療における死」というテーマに惹かれていて、『死の予告』(2006) の翻訳を即断したのも、こうした背景があった。ただ社会学としてこのトピックをどう扱うのかという自問と疑問に確信を持たずにいたところ、2011 年の日本社会学評論の「分野別動向」で「死の社会学」が取り上げられたことが契機となり、遅ればせながら再スタートを切った。2014 年には国際社会学会が横浜で開催され、その医療関係部会の一つが medicalization をテーマに掲げたことから、“Rethinking ‘Medicalization of Death and Dying’: Explication through Examining Japanese Case” というタイトルの報告を決断した。2015 年には「死の社会学的研究に向けて」(『人文研究』第 66 巻)、2018 年には「死と死別の社会学」(『都市文化研究』第 20 巻) を書き上げたものの、最終的に書籍という形態にまではいたることができなかった。やはり積年の自問に耐ええなかったこともあるが、社会学研究としての積極的意義を自ら確信しえなかったことが大きかった。

幸いというべきか、この研究生活終期での再度の挫折に対して、ほぼ同時期に 30 周年を迎えた、ともに縁の深い日本社会病理学会 (1986 年設立) と日本保健医療社会学会 (1989 年設立) が、シンポジウムあるいは論文集の形での発表の機会を与えてくれた。前者は 30 周年記念シンポ以来の若手の RT 企画をもとに、学会企画として社会病理学の学問的構成の現代的意義を問う『社会病理学の足跡と再構成』(学文社: 2019) を刊行し、「『逸脱の死』を問い直す」論稿を寄稿できた。また、後者では 2019 年の「30 周年記念シンポジウム『保健医療社会学の知の可能性: 研究・教育・実践の未来』」に、「研究」担当として登壇

し、論稿を寄せることができた（「保健医療社会学における研究の現在と未来」（『保健医療社会学論集』第30巻2号）。自らの研究上の区切り、とはいえないまでも、研究者生活上深く関与してきた学会での振返りの機会を持てたことは望外であった。

4 最後に

研究者として、ライフワークとでもいうべき主題を持ち、一貫した探求を持続する、というタイプではなかった。この点において忸怩たるものがある。自らの問題意識と関心を一定程度あったとはいえ、医療社会学への傾斜は偶然の契機によるものであり、家族研究も所属先の必要に迫られてのものであった。とはいえ、その中でも自分にとって興味深いテーマ・トピックを掘り続けてきたことは確かだろう。ウェーバー、デュルケム、ジンメル、パーソンズ、バウマン——彼らの論稿自体の研究を一方に置きつつ、そのまなざしをもって家族社会学、医療社会学、逸脱研究といった個別分野の研究を眺める、というスタンスを取ってきたのであろうし、また取らざるをえなかったとも言える。

最後に、僭越を承知の上で、すでに鬼籍に入られた先生方への学恩を記しておきたい。

作田啓一先生。先生の『価値の社会学』、『深層社会の点描』、『恥の文化再考』は、社会学への道への招待であり、道標だった。また講義で拝聴したルソー研究、『個人』、『命題社会学』の「予言の自己成就」には魅了された。死の社会学への関心は、「戦犯受刑者の死生観」「日本人の連続観」（『価値の社会学』所収）からの涵養の結果でもあった。

中久郎先生。先生の社会学者としての使命感、コミットメントへの専心には身近で接していて常に敬服していた。戦争経験を基底としつつ、日本社会のあり方、社会の抱える多様な問題に対する社会学者としての可能なあり方を探りつつ、他方で社会学という学問自体のあり方と可能性を探求する姿勢が、先生のすべての業績には反映されていた。

富永健一先生。先生との直接の接点は数年しかない。しかし、先生の姿勢には中先生と同質のものを感じさせられていた。研究会で示されていた、貪欲なまでの研究意欲、若手の研究を自分の研究の中にどう位置づけ、取り込んで展開させていくのかという強烈な問題意識には心底感服させられた。

森田洋司先生。先生とは、奈良在住という共通性もあり、帰りの車中よく四方山話をさせていただいた。その非凡な着想力、展開力と並んで、非常に優れた現実感覚をも併せ持つ研究者であり、義に厚い方だった。今年の年明けの訃報に接し、年末に回復途上にあるとのお話をうかがっていたこともあり、まさに言葉を失った。

若くして逝去した二人の兄、親友、同僚、先輩、そして両親を含めた親しい人たちの思い出とともに、心からの冥福を祈り、稿を終えたい。